

この本こそ、私のために！

「この本こそ私一人のために書き残されたのだ、
という読書の体験をもたないひとは気の毒な、不幸な人だ」唐木順三は随筆集「朴の木」
でこのように書いている。本との邂逅を心に刻む名文である。

私は20年前のある日、この本を書店で偶然に発見し、よく読まないで片山 克さん
(2021年8月8日88歳で逝去された)に送った。

片山さんは坂村真民さんを人生の師と仰ぎ、その晩年を支えた人である。師である真民さんは「朴ノ木」をこよなく愛し、万葉詩人を真似て朴の花びらで美酒をたしなむ人であった。片山 克さんは師が喜ばれることは自ら進んで実行し、朴ノ木を植える運動、朴の会の組織をし、真民さんから全国朴の会の会長を命じられ、その活動を全国に広め、「念ずれば花ひらく」等の碑を日本全国全県に建てる運動を、更に世界の五大大陸にまで、真民碑を建立する立役者となった人である。日本のへそともいわれ、朴ノ木が豊かに茂る岐阜県白川村で全国朴の会大会を開いて地域活性にも貢献された。(全8回各地で開催された)坂村真民さんについて、又朴ノ木については生き字引のような存在であった。

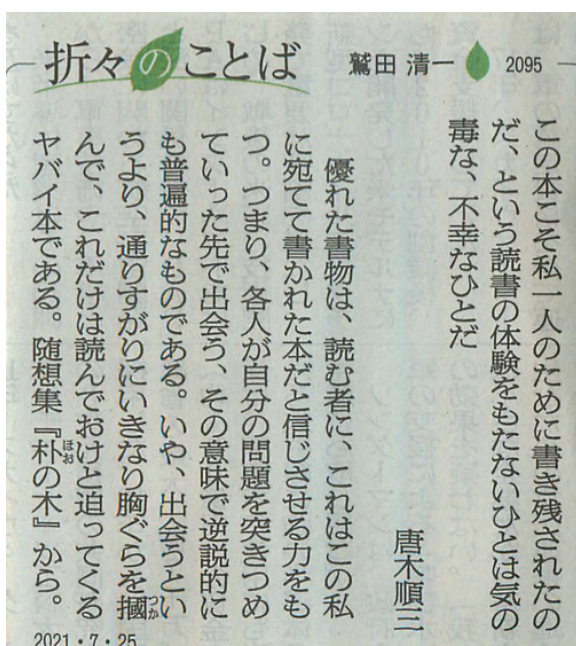
片山さんは「朴」についての本は言語を問わず蒐集されておられたので、冒頭の書をまだご存じなかった段階で、私が送付すると、喜ばれる前に、とても悔しがられた。

それほどまでに真民さんを愛された人である。

そんな思い出を闘病中の片山 克さんと話していた2021年7月25日朝日新聞に次のような記事が掲載された。私は早速にこの記事を送った。もう返事は書けないと電話をもらった。

「真民さんは私の師であったことは間違いなし」片山 克さんから私が最後に聞いた言葉である。

私は2021年5月に「ヘブライ人への手紙に学ぶ」という本に邂逅していた。めぐりあいの不思議とよく言われるが、流れの中に刻まれる時が人生にはしばしばある。おそらく私の人生の最後の邂逅だ、写記をしたいと思った。その承認を頂く流れの中で私は、恵まれて新しい師を与えられた。正に「カイロスの時」である。そして8月から33ヶ月に渡る写記も旅を始めることになった。



松山幸生先生 講述・「ヘブライ人への手紙に学ぶ」



この「ヘブライ人への手紙に学ぶ」は松山幸生先生（2021年5月2日召天）が1996年1月から1998年10月迄33回に渡って講話されたものをお弟子さんたちがテープ起こしをされ記録された講述著作で、2001年1月に発刊されました。3分冊1000頁に及ぶ大作です。話し言葉で書かれています。読みやすく行間の空気が伝わってきます。同じ企画が「申命記」にもあります。

（1992年6月刊、4分冊2段組1027頁の大作・左の写真参照）

小原靖夫（個人誌ベストピアの筆者）は写記させていただくことを関係者皆さ

まから許可を頂き33回に分けて連載いたします。その目的は自分の信仰の立て直しです。ヘブライ人への手紙は長年の間に信仰が揺らいだり、離れたりしている者に励ましを与え、悔い改め・正しい信仰へと導いてくれます。80歳を迎え、最晩年を悔いなく生きる道しるべ、日々の糧として松山幸生先生のお声を聴きながら写記させていただきます。弱い私は自分の内に決意しても果たすことができない傾向にあります。ここ、「ベストピア」に掲載することによって教友の皆さまからのお導きとお励ましによって完遂いたす所存でございます。

尚、松山幸生先生の関連記事はベストピア20121年5月号（第411号）を参照くださいますようお願い致します。

松山幸生先生講述「ヘブライ人への手紙に学ぶ」の連載はベストピア・ホームページの左のサイドメニューに掲載いたします。

全33回、目録と連続写記掲載日程は次の通りです。

ヘブライ人への手紙に学ぶ

第1回・・・2021/08/	終わりの時には御子によって語られた	1章1節～4節。
第2回・・・2021/09/	キリストを証する七つの言葉	1章5節～14節。
第3回・・・2021/10/	語られた、聴いた「大いなる救い」	2章1節～4節。
第4回・・・2021/11/	神の御子イエスの受難と栄光	2章5節～9節。
第5回・・・2021/12/	人が聖なるものとなるために	2章10節～18節。
第6回・・・2022/01/	天の召しにあずかっている聖なる兄弟	3章1節～6節。
第7回・・・2022/02/	だから、今日、御声を聴いたならば	3章7節～19節。
第8回・・・2022/03/	安息日が神の民に残されている	4章1節～13節。
第9回・・・2022/04/	人間の弱さを担われた大祭司	4章14節～5章10節。

第10回・・2022/05/	一人前のキリスト者の生活とは	5章11節~~6章8節。
第11回・・2022/06/	私たちの信仰は神の忍耐の賜物です	6章9節~~12節。
第12回・・2022/07/	前半のまとめ, 終わりの時と・救い・贖い	1章1節~~6章12節
第13回・・2022/08/	真実なる神の約束のもとに錨りを降ろせ	6章13節~~20節。
第14回・・2022/09/	メルキゼデクと同じような大祭司イエス①	
	民の罪を執り成せる真の大祭司とは	7章1節~~15節。
第15回・・2022/10/	メルキゼデクと同じような大祭司イエス②	
	ご自身を引き裂いて贖いになられた	7章16節~~28節。
第16回・・2022/11/	偉大な大祭司・神の子イエス①	
	更にまさった契約の仲介者	8章1節~~13節。
第17回・・2022/12/	偉大な大祭司・神の子イエス②	
	ただ一回限りの永遠の贖い	9章1節~~22節。
第18回・・2023/01/	偉大な大祭司・神の子イエス③	
	終わりの時は既に始まっている	9章23節~~28節。
第19回・・2023/02/	偉大な大祭司・神の子イエス④	
	あなたの心を神に献げなさい	10章1節~~18節。
第20回・・2023/03/	聖なるものへの畏怖・畏敬の勧告	10章19節~~25節。
第21回・・2023/04/	約束の賜物を受ける条件は忍耐です	10章26節~~39節。
第22回・・2023/05/	信仰の先達として証された人びと①	
	義人アベル・エノク・ノア	11章1節~~7節。
第23回・・2023/06/	信仰の先達として証された人びと②	
	信仰の父アブラハム	11章8節~~12節。
第24回・・2023/07/	信仰の先達として証された人びと③	
	天にある故郷を目指して歩む	11章13節~~16節。
第25回・・2023/08/	信仰の先達として証された人びと④	
	アブラハムとその族長たち	11章17節~~22節。
第26回・・2023/09/	信仰の先達として証された人びと⑤	
	偉大なモーセとそれに続く者たち	11章23節~~40節。
第27回・・2023/10/	信仰の証人たちに囲まれて生きる	12章1節~~13節。
第28回・・2023/11/	すべての人との平和、聖なる生活の追求	12章14節~~29節。
第29回・・2023/12/	神に喜ばれる生活の実践と奉仕	13章1節~~6節。
第30回・・2024/01/	神の言葉を伝えた人を思い起こしなさい	13章7節~~19節。
第31回・・2024/02/	永遠の契約の血による羊の大牧者	13章20節21節。
第32回・・2024/03/	恵みがあなたがた一同と共にあるように	13章22節~~25節。
第33回・・2024/04/	後半のまとめ・あとがき。	
	イエスを見つめながら走り抜こう	6章13節から13章25節。

松山幸生先生講述「ヘブライ人への手紙に学ぶ」の連載はベストピア・ホームページの左のサイドメニューに掲載いたします。

追悼・片山 克さん

本号は片山 克さんを追悼し、ご夫妻が坂村真民さんと親しく関わっておられた証をご本人の文章で紹介します。

片山 克様絢子様夫妻と坂村真民さんの友好の証

(1)片山絢子さまの投稿・月刊俳誌「糸瓜」平成14年5月号掲載

「念ずれば花ひらく」や「二度とない人生だから」などの代表作で知られている坂村真民さんは、砥部町に在住、九十三歳の今も豊饒かくしやくとして日々詩作に励まれている現役の詩人である。やさしく語りかけるような言葉とその奥深さは、多くの人々の心の糧となっている

花や鳥、月や星など身近なものを題材にされているが、中でも「朴とたんぽぽ」がお好きで、詩の中にもよく登場する。お庭の朴の木に対して「今年も沢山花をつけてくれたあ」と愛しそうに見上げられる姿は何ともほほえましい。

夫が大病をして、やっと元気になった頃である。「真民先生を人生の師と仰いでゆきたい」と突然言った。全著書を読み肝に銘じ、ご本人にお会いする度に心が決まっていたのであろう。

真民さんは毎月新作を月刊詩誌『詩国』として希望者に無償郵送されているが、その数が増え続けるため少しお手伝いしようということになった。真民さんの一番お好きな朴より「朴の会」という名を頂いてスタートした。当初は二十数名であったが、十六年経った今、私たちの会員だけでも三千名を遥かに越えている。

真民詩を生きる力としている人たちは、全世界に広がり、その勢いは止まらない。

今はご高齢のため遠出はされないが、数年前までは時々各地に出かけられた。私もたまにご一緒させて貰った。車中で隣りに座ると、いろいろと話しかけて下さる。

その中の一つに「人間は何が大事か」というと『感謝と感動』、どんな苦しい時でもこの心を失ってはならない。宇宙一切のものに」（真民さんはこの言葉を度々朴庵例会においても語られている。その胸中に何を秘められていたのか。繰り返された。長い期間に渡り繰り返された――小原注記）

また、車窓から外を眺めながら「日本は春夏秋冬の国、歳時記はいいなあ、見てみると季節がきらきらしてくる」、続けて、芭蕉や山頭火などの人物についても話して下さる。私への配慮とも思われるが、心洗われるひと時である。（絢子夫人は俳句の師匠であり、地元俳壇の選者でもあられた。真民さんも一目おいていた人である――小原注記）

明治生まれの気骨や信念は確固たるものをお持ちであるが、人々に向けられるまなざしは優しく暖かい。そういう中で、どれほどのお教えを頂いただろう。その一語一語が体に染み込んでいる。

先日、横浜の小学校六年生の孫が弾んだ声で電話をしてきた。学校の広報誌に校長先生が、真民詩を載せられたというのである。題は「ねがい」で、見えない根たちの/ねがい

がこもって/あのような/美しい花となるのだ/という短い詩である。真民さんは、人の目の触れないところで汗を流し、懸命に支えている行為を「陰徳を積む」といい尊いものとよく口にされるが、校長先生も、子供たちに理解できるような注釈をされていた。こうして思いがけぬところから詩縁ができ大きな輪となっていく。

月末の我が家は八面六臂、海外五カ国を含め全国の真民ファンへ『詩国』や会報を送るのに大童、夫のはじめた小さなボランティアが今ではライフワークとなっている。これも私たちに与えられた仕事と受け止め、気海丹田に感謝の心を根付かせ、少しでも長くお手伝いできればと願っている。

編者解説

①片山絢子さまは松山市で有名な正岡子規の門弟が造られた俳句の会「糸瓜」の会員であり、指導者の一人として活躍された人である。その文章の校正力は素晴らしく真民さんの月刊誌「詩国」の校正もされていた。

②この文章から「朴の会」の由来が明らかになる。

「朴の会」は真民さんが片山 克さんに与えられた名前である。

③文中時々真民さんの遠出におつき合いをしたとあるが、毎月「朴庵例会」では自宅と会場の送迎を20年間されてきた。その車中でのお話は語るに尽きないほどある。真民さんの心の悩みが多く語られ真民さんにとってなくてはならないご夫妻であった。真民詩の普及がご夫妻のライフワークになった。県外から砥部を訪れた人々は空港までの送迎を受けている。直近の絢子夫人からのお手紙によると朴の会の会員であった人や学友から、次々と便りがとどいているという。「克はお金は残しませんでした、大勢の人の心に残る人だった」と思い、私も尊敬の念が増しています」と書かれている。

④文中アンダーライン「夫が大病をして、やっと元気になった頃である。」

片山 克さんは45歳、伊豫銀行石井支店開設の支店長になられる寸前に胃癌が発見され、胃の3分の2を摘出する大病を患った。病院で支店長業務をこなされ47歳で福山支店長として復帰された。同支店から本店に栄転の送別会で地元の社長から「坂村真民さん」を知っているかと問われ、不知の恥をかいた。その後、猛烈な真民ファンとなる。

⑤「糸瓜」について「おもしろい名前ですが、これは正岡子規の絶筆三句がすべて「ヘチマ」の句であったことに由来しています。この会は主宰者がなくなると4つに分裂したが、「糸瓜」を名乗る勇気ある人はありませんでした。これは「朴の会」を名乗る勇気のある人もいないことに通じるように私は思います。

参考

正岡子規の絶筆三句

糸瓜咲て痰のつまりし仏かな
痰一斗糸瓜の水も間にあはず
をととひのへちまの水も取らざりき

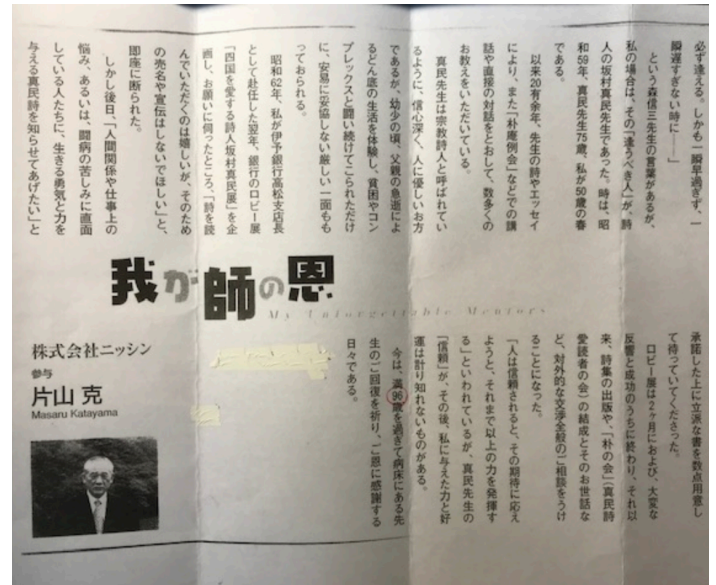
(2)片山 克さん投稿「我が師の恩」平成17年の記事

「人間は一生のうち逢うべき人には必ず逢える。しかも一瞬早過ぎず、一瞬遅すぎない時に」という森信三先生の言葉があるが、私の場合は、その「逢うべき人」が、詩人の坂村真民先生であった。時は、昭和59年、真民先生75歳、私が50歳の春である。

以来20有余年、先生の詩やエッセイにより、また「朴庵例会」などでの講話や直接の対話をとおして、数多くのお教えをいただいている。真民先生は宗教詩人と呼ばれているように、信心深く、人に優しいお方であるが、幼少の頃、父親の急逝によるどん底の生活を体験し、貧困やコンプレックスと闘い続けてこられただけに、安易に妥協しない厳しい一面ももっておられる。昭和62年、私が伊予銀行高松支店長として赴任した翌年、銀行のロ

ビー展「四国を愛する詩人坂村真民展」を企画し、お願いに伺ったところ、「詩を読んでいただくのは嬉しいが、そのための売名や宣伝はしないでほしい」と、即座に断られた。

しかし後日、「人間関係や仕事上の悩み、あるいは、闘病の苦しみに直面している人たちに、生きる勇気と力を与える真民詩を知らせてあげたい」と手紙を書き、改めて訪問したところ、承諾した上に立派な書を数点用意して待っていてくださった。ロビー展は2ヶ月におよび、大変な反響と成功のうちに終わり、それ以来、詩集の出版や、「朴の会」(真民詩愛読者の会)の結成とそのお世話など、対外的な交渉全般のご相談をうけることになった。「人は信頼されると、その期待に応えようと、それまで以上の力を発揮する」といわれているが、真民先生の信頼が、その後、私に与えた力と好運は計り知れないものがある。今は、満96歳を過ぎて病床にある先生のご回復を祈り、ご恩に感謝する日々である。



編者解説

この記事は2005年末に書かれたものである。

この年の4月真民さんは急変されて「朴から別離して樵にする」趣旨のことを「鳩寿13号」に記された。その前年の2月「詩国500号」記念第8回全国朴の会が開催されたがこの時をもって「朴の会」は解散された。その少し前から片山 克さんは真民さんに会えなくなっていた。片山 克さんに思い当たる節はない。「何故だろう」と悩み始められた。

その状況下でこの投稿がなされている。

(3)片山 克さん最期の投稿 四国中央読書会100回記念文集 2021/06/

「寺田先生のご教導に心から感謝」

ご生前中は、森信三先生、坂村真民先生のこと、いろいろ とご教導 を賜りまして、誠にありがとうございました。私は、今も毎朝、寺田先生が釈義されたお経本を読誦し、最後に「南無阿弥陀佛」を三誦するお祈りを仏前に捧げています。寺田一清先生が、意識をつけられた「延命十句観音経」と「佛説摩訶般若波羅蜜多心経」は、誰にも理解できる言葉で、時には、お経本を朗誦した後、意識の部分も読み上げさせて頂いております。

真民先生は「寺田さんの意識釈義には、宗教家と違った味わいがあり、本当にすばらしい」と絶賛しておられました。また、寺田先生のお経本の裏面には、『不尽先生詠草』として、森信三先生の代表的な短歌十首が紹介され、『坂村真民詩集』には「二度とない人生だから」「かなしみ」「七字のうた」「念じて下さい」の四詩全文が掲載されています。寺田先生とご一緒させて頂いた思い出は、平成九年五月、小原靖夫ご夫妻の紹介で一行八名が、知恩院を訪ねて、山本空外上人の講話を聞き、「念ずれば花ひらく」第七六番碑に

参詣したこと。同年七月、松山市に於いて、坂村真民先生と渡辺和子女史の対談に同席させて頂いたこと。平成十六年二月私がお世話した『詩国』発行第五百号記念大会にご出席の上、鍵山秀三郎氏らと共に、真民先生に祝辞を述べて頂いたことなどであります。寺田先生は、坂村真民先生を多くの人に知らせるため『暁天の祈り』という小冊子を発行しておられますが、その巻末で、新刊詩集『二度とない人生だから』を推奨し、次のように書かれています『真民先生の「あとがきは」もちろん全国朴の会会長片山克様の「添え書き」がまた卓抜です』と。
心から感謝申し上げ、先生のご冥福をお祈り申し上げます。

編者解説

この投稿は6月中旬自宅で療養中に、寺田一清さん（1927年－2021/3/31）への感謝を書かれています。寺田一清さんは教育者・哲学者・森信三に仕えたお弟子さんで、片山 克さんが坂村真民さんに仕えたように身边のお世話も徹底された人として有名である。著書も多い。その一冊に「人は終生の師をもつべし」がある。片山 克さんと寺田一清さんは「師を持つということ、師に仕えるということの厳しさ」を共感しあった仲間であったと私は想像している。文中に私の名前も出てくるが寺田一清さんは1996年私が企画したイスラエルの旅（「念ずれば花ひらく」第303番碑再会の旅）に参加してくださった。心の寛いお方であった。

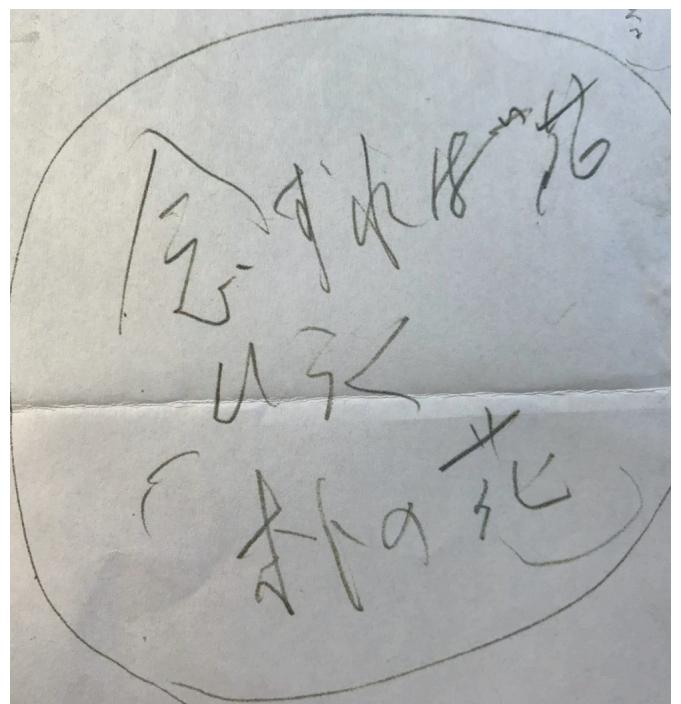
(4)忠誠を通した渾身の一筆

2021/07/26日の枕元に常備されていたメモ帳に記された一筆です。

逝去される13日前、5度目の入院で「治療方針が間もなく決まるので、もう一度退院したい」と私と電話で約束をしてくれた頃、肉体的にも精神的にも一番辛かった時に、枕元の鉛筆をとり、渾身の力を込めて書かれた一筆です。

絶筆には漢字を書く力がなかった。カナとひらがな文字でやっと絢子夫人判読できる次の文字であった。

しんじんなるいのり＝じっせんてつがく
もりしんぞうせんせい（ごみひろい）
かぎやまさん（おそうじ べんじょ）



次ページからパリ通信

パリ通信 第117号

新学期・日本の留学生をアテンド

9月はフランスの新学期。学校だけでなく、スポーツクラブ、文化施設の年間会員登録など新たな一年の活動を始める時期だ。「衛生パスポート」(ワクチン2回接種終了または72時間以内のPCR検査陰性証明)があればコロナ禍以前に近い生活ができるようになった。

フランスも日本もワクチン接種が進み、フランスに留学してくる日本の大学生が少しずつ到着している。長らく中断していた学生ビザがこの夏から発行されるようになり、日本で2回のワクチン接種を終えた学生がパリや地方都市で大学生活を始める。ビザを必要としない90日以内のフランス語学研修、姉妹校での短期ワークショップに参加する大学生もいる。少しずつだが海外留学が再開されたことは喜ばしい。

パリ・オステルリッツ岸のアジール・フロタンに関心を持つ日本の大学生を船内に案内した。日本もフランスと同様に対面授業はほとんどなく、当分はオンライン授業が続くそうである。後期授業まで時間があるので日本帰国時の厳しい水際対策にも負けずにフランス入国したと言う学生に日本に戻ってどうするか尋ねた。

「入国時三日間の隔離」(空港近くのホテルやワンルームで蟄居)は逃れようがないので我慢して、空港を出たら電車で帰宅するそうだ。「公共交通機関は利用できないでしょう。私は関空まで家族に車で迎えに来てもらいましたよ。」と言ったら「そんな真面目な人は珍しいです。日本では罰金も法的強制力もないし、オリンピックは強行して、我々には無理なお願いを押し付けるのはなしです。レンタカーで帰宅すると誓約書に記入して電車で帰ります。」

7月には日本入国後連絡が取れなくなった人が700-800人いたそうで、水際対策への対応も結局のところ個人個人の判断と倫理観に集約されるようだ。

「布で包まれた凱旋門」

コロナ禍との共生の受取り方も個人差があるとは言え、ワクチン接種のおかげで文化活動が戻りつつあるのは幸いだ。9月18・19日は「ヨーロッパ文化遺産の日」、通常は一般公開されない文化財を見ることができる。その「文化遺産の日」を前に「布で包まれた凱旋門」に気付かされたことがある。

1805年オステルリッツの闘いに勝利したナポレオンが凱旋を祝して1806年建造した

「凱旋門」はパリを代表する文化遺産だ。その「凱旋門」を淡い銀色のリサイクル・ポリプロピレン製の布で包帯の様にグルグル巻きにした。昨年ニューヨークで亡くなったアー



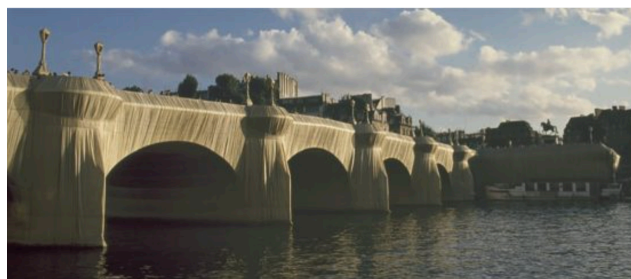
チスト、クリスト(1935-2020)と同じく現代アーティストの妻ジャンヌ＝クロード(1935-2009)の遺作である。

ブルガリア生まれのクリストは首都ソフィアのボザールで学ぶ。1944年ソビエト軍がブルガリアに侵入し、プロパガンダに利用される芸術から逃れるため、1956年ウィーン、1958年パリに移住する。

1985年にはパリの「ポン・ヌフ」を包んだ。

偶然パリにいて、グルグル巻きの橋は印象的で綺麗だと思ったが、その意味を考えることはなかった。

クリストとジャンヌ＝クロードは「ポン・ヌフ」だけでなく、アメリカ合衆国コロラド州のサフラン色のヴァレー・カーテン(1972年作)、ベリリンの国会議事堂(1995年作)など包む芸術を展開した。



パリッ子を驚愕させたポンヌフ橋を乳白色の布で梱包した作品は、1985年9月16日～22日まで登場。《The Pont-

芸術とは

遺作となった「凱旋門」を見て、芸術が何の役に立つのかという疑問が湧いた。エトワール広場の真ん中に200年以上も君臨している凱旋門はそこにあって然るべき、揺るぎない存在だ。それを包んで隠してしまう、見えなくしてしまう。

25.000㎡という巨大な表面積をクレーンを使って140名の手で包む。自分の作品を売却して10億円を超える巨額な費用を使っている。しかも9月13日から包み始め、3週間後には取り外される。芸術とは何かと思う。ソビエト軍の支配下を生きたクリストが芸術の役割を考えない筈はない。「我々の作品は自由である。誰にも購入できないし、誰にも所有されない。(ユマニテ紙)」包まれて存在が見えなくなることで初めて見ることを理解する。目に見えるものも見えないものも明日は無くなる。残すことなく、残さないことを目指した芸術があることに気付かされた。(古賀順子記)

参考:「ポン ヌフ」の位置 (編者記)



セーヌ川を跨ぐ2つの橋